

# 下刈時期によって生ずる植生の変化 と苗木に及ぼす影響について

久々野営林署 山越 実 神谷義美  
松井 栄 林 喜芳  
今井久是 中井正博  
住 英明

## 1. はじめに

久々野営林署の下刈作業工程は、経営改善の努力の結果、昭和58年にはha当たり3.5人であったのが、昭和56年度にはha当たり3.29人となり、着実に成果をあげてきた。

しかし、事業地の奥地化による通勤時間の増に伴う実質労働時間の減少や、基幹作業職員の高齢化等の諸条件により、これ以上の工程の向上を望むことがむづかしい状況になってきた。

そこで、57年度の直営での下刈実行面積286haのうち、笹型林床の占める割合が80%以上であることに着目し、時期別刈払量と、植栽木に対する影響度を調査し、効果的な下刈時期の検討を行うため、試験地を設定し調査した。

## 2. 調査箇所(表-1)

57年度の下刈実行箇所で、笹型林床のある7担当区において、下刈の平均的回数である4回目の箇所を基準に設定した。

## 3. 調査方法(表-2)

### (1) 内 容

- ① 調査項目は、刈払総重量、笹丈、笹本数、苗長とした。
- ② 6月を5日毎に区切り6回調査し、7・8月に追跡調査することとした。
- ③ 1回の調査は2プロットとし、1プロットは25㎡とした。
- ④ 更にプロットの中に1㎡の標準地を設けた。

### (2) 順 序

- ① 6月には1㎡内の笹丈、笹本数を測定後、プロット内の下刈を行い刈払総重量を測定した。  
また、第1回目のみ全プロットの苗長を測定した。
- ② 7・8月には笹の再生量と、苗木の生長量を把握するため、7月中旬には、再生笹丈、再生笹本数、苗長を測定し、8月中旬には再生笹刈払総重量、再生笹丈、苗長を測定した。

#### 4. 調査結果（表-3, 表-4）

##### (1) 笹の刈払総重量

① 6月の1回目から3回目にかけて増加しており、更に4回目から6回目にかけても増加している。

② 笹の再生量は、2回目にあたる6月10日までが旺盛である。

##### (2) 植栽木に対する影響度

① 当初刈払時期による苗木の伸長度を考え調査を行ったが、影響は殆んど認められなかった。

##### (3) 再生した笹丈

① 刈払時期に関係なく8月にはほぼ同じであった。

#### 5. ま と め

下刈の作業工程は、刈払量によって大きく左右することから、刈払時期が苗木に及ぼす伸長の影響が、6月期だけをみると差があまりみられなかったので、下刈開始時期は、再生笹が翌年度に及ぼす影響を考え、再生力が弱まる6月11日～6月15日が良いと判断される。

なお、当署の56年度下刈着手時期は、56豪雪による倒木起しの影響で、7月上旬に実施したところha当たり3.29人であったが、57年度は6月20日前後に着手したところ、ha当たり3.22人となり労働生産性の向上がみられた。昭和58年度は、下刈着手前期を更に10日程早め、労働生産性の向上を図ってまいりたいと思う。

造林事業は適期適作業が必要であることは良く言われ、私達もその必要性を痛感しているが、的確な適期は案外知られていないのが現状ではないかと思う。

以上の報告は、調査方法、資料のとりまとめ等不十分であるが、今後とも調査の充実に図り、さらにきめ細かな適期適作業を進めるとともに、労働生産性の向上を図り、活力ある森林づくりに努めてまいりたい。

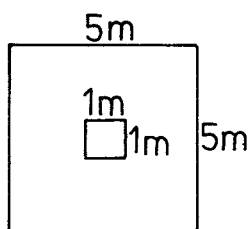
表-1 調査箇所

担当区	国有林	林小班	標高	方位	傾斜	植栽樹種	植栽年度	刈払回数
秋神	胡桃島	234ぬ	1400	S	32	ヒノキ	55	3
上ヶ洞	近城	115よ	1100	SW	30	ヒノキ	55	3
中洞	池ヶ洞	105む	1550	NW	26	トウヒ	54	4
野麦	野麦	156と	1650	W	32	カラマツ	54	4
黒川	鈍引沢	275ろ	980	SW	30	ヒノキ	54	4
青屋	青屋	76は	1300	NE	35	ヒノキ	53	5
千間樽	千間樽	178に	1580	N	20	カラマツ	54	4

表-2

1. プロットの設定.

6月を5日毎に区切り6回測定するため12設定.



2. 調査順序.

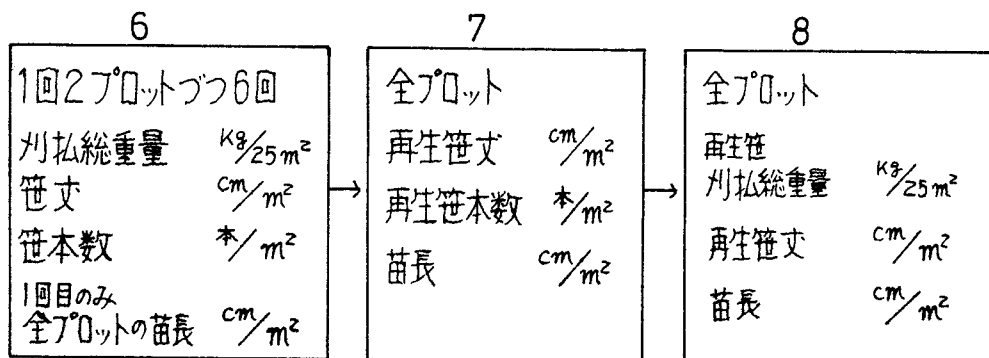


表-3

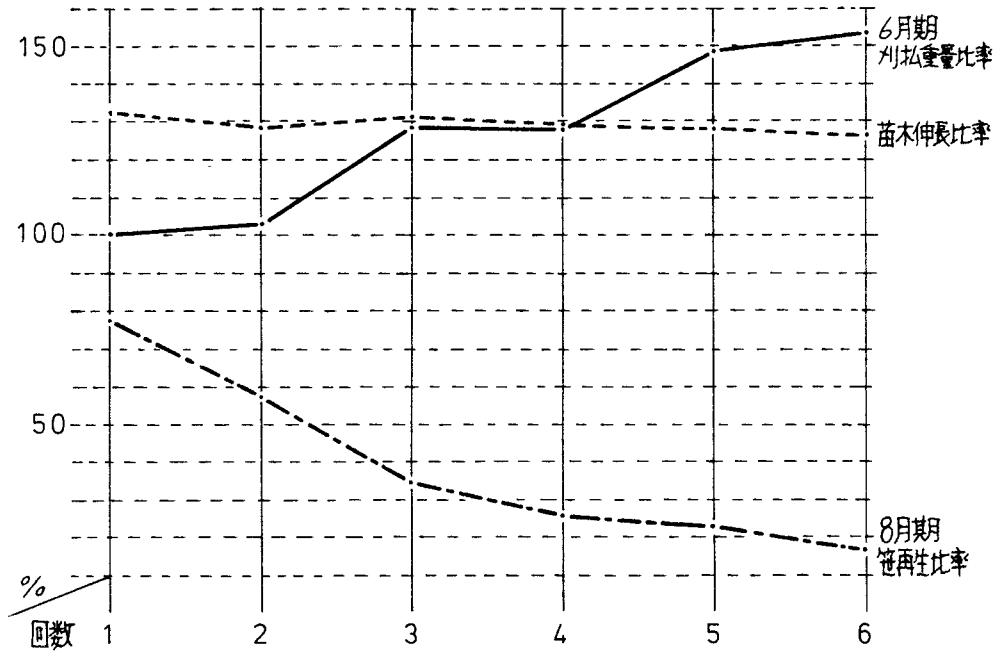


表-4 再生した笹丈調査表

注) 6月は刈払う前の笹丈、  
7~8月は再生した笹丈。

